

「大道、今度、お母さんと一緒に手話サークルに参加してみない？」

「えっ。」

僕は、自分の名前さえ手話で表せないし、少し人見知りなので、正直あまり行きたくなかった。しかし、母は手話が得意で、その手話サークルの会長もやっているのです、僕にも体験して欲しいと思っているようだった。

大きなホールを抜けてエレベーターに乗り、さっそく部屋に入った。すると、母の知り合いの方が、すぐに母と僕のところ近づいて来られた。その方は、耳が聞こえないので手話で話しかけて下さった。身振りや手指の動きで一生懸命に思いを伝えようとなさったが、僕には何もわからなかった。僕が困っていることに気づいた母がそばに来て、

「こんにちは。」

という挨拶から手話通訳してくれた時、僕はとてもほっとした気持ちだった。その後、難聴の方や、母のように手話のできる方、脚が不自由な方、高齢者など様々な方達がいらっしやった。

全員が着席すると母が前に出て、

「今日はみんなでリース作りをします。」

と手話で伝えた。僕も一緒にリース作りに参加することになった。リースに人形や花、茎葉などを付けているうちに、ペンチが必要になった。僕はペンチを持っていないことを母に伝えた。すると母は、

「ペンチを持っていないなら、『ペンチを貸してください。』と言わなくちゃ。」

と言った。そして、どのように手話で伝えるかを教えてくれた。僕は、その教えの通り一生懸命伝えてペンチを借りることができた。

こうした中で、僕は気づいたことがあった。それは、手話で伝えるときは、相手の体をトンと叩いてこちらを向いてもらい、僕の動きをしっかりと見て頂かなくてはならないということだ。僕は耳の聞こえない方達がどれだけ大変かを改めてわかった気がした。

やっとリースが完成して黒板に飾った。どの作品もとてもすばらしい出来だった。会員の方達と母と僕とで作品を見ていたときに、母が、

「大道の作ったリースが上手だって言ってくれたよ。」

と教えてくれた。僕は思わず、

「ありがとう。」

の意味で頭を下げた。その後も母と会員の方達が手話で会話する姿を、僕は椅子に座って見ていることしかできなかった。帰る時も会釈しかできなかった。

今回の体験でわかったことがいくつかある。第一には、耳の聞こえない方達の大変さだ。常に手話の動きを読み取ることや、身振りや手指の動きで意思を伝えることは、とても疲れることだろう。

第二には手話の難しさだ。母は、友達に難聴の方がいたことや、仕事で必要だったために手話を始めたそう。会員の方達と楽しそうに手話で意思を伝え合う母の姿を尊敬の気持ちでみつめた。また、母の努力のすばらしさに気づいた。

第三の発見は「手話」のすばらしさだ。サークルの方達は、誰もが明るい表情だった。それは、「手話」によって仲間と自由に意思を伝え合えるからだ。

僕は、今回会員の方達に全部の気持ちは伝えられなかった。しかし、これからも僕は日常

の生活の中でも耳の聞こえない方達と触れ合う機会があるだろう。その時こそ少しでも話しかけたい。僕も母に簡単な手話だけでも教えてもらって難聴の人たちの笑顔の輪に入りたいと思った。